

ほぼ千八百九十九年前のことです。

ロートリンゲンのある村に、ハンスペーターという鍛冶屋が住んでいました。まじめに働いて、むだづかいもなかったのに、いろいろな災難に見舞われて、ある日とうとう、財産をぜんぶなくしてしまいました。もう死んでしまおうかと思いましたが、愛する妻と小さな八人の子どものことを考えると、そんなことはできませんでした。そこで、親しい友だちをたずねて、いくらでもお金を貸してもらえないかとたのみました。けれども、だれも貸してくれませんでした。

ある朝早く、鍛冶屋は、どうしていいか分からないままに、道を歩いていました。大粒のなみだがほおを流れました。そのとき、むこうから、身なりのよい紳士が近づいて来ました。

「あなた、どうしてまたそんなに悲しそうな顔をしているのです」と、紳士はたずねました。鍛冶屋は、自分の悲しい身の上を細かに話しました。すると、紳士は、にやりと笑って、

「あなたを助けるなんて、簡単なことですよ」といいました。鍛冶屋は、とびあがって、「旦那さん。いい方法があるなら教えてください。どうやって家族を助けたらいいか教えてくださいたら、どんな事でもやりますよ」といいました。

「では、いいでしょう。この書類に署名するだけでいいのです。ここには、今日から十年後、あなたの体もたましいもわたしのものになると書いてあります。これに、あなたの血で署名して家に帰れば、戸棚からお金がざくざく出てきますよ。これからはいつでもお金と富が手に入ります」

鍛冶屋は、こんなことができるのは、悪魔しかないと思いました。悪魔にたましいを売りわたすなんて、考えただけでもぞっとしましたが、妻や子どもたちを救いたい気持ちのほうが強まりました。そこで、ナイフで指を切って、ふるえながら書類に名前を書きました。すると、紳士のすがたは消えました。鍛冶屋は、夢を見たんだろうかと思いつながら家に帰りました。

家に着くと、鍛冶屋は、このことをひとことも家族に話ませんでした。そして、すぐに戸棚を開けてみました。すると、金貨がぱらぱらとこぼれて床に落ちました。戸棚

には、金貨がぎつしり詰まっていたのです。鍛冶屋はそれをポケットにつめて、借りたお金を返しに行きました。

まもなく、鍛冶屋は、大きな仕事場を建てました。

あるとき、イエスさまと聖ペテロが、この地方にやって来ました。ふたりは、長い旅でたいそうつかれていました。ペテロは、宿を探してほとんどすべての家の戸をたたきました。泊めてくれるところはありませんでした。イエスさまは、

「村はずれの鍛冶屋の家に行つてたずねてごらん」といいました。ペテロは、いわれたとおり、鍛冶屋の家に行つて、泊めてくれとたのみました。鍛冶屋は、

「どうぞ、お入りなさい」といって、ふたりをまねき入れました。そして、おかみさんに、

「このおふたりに、おいしい夕食を用意しておくれ」といいました。イエスさまとペテロは、おいしく食べ、やわらかなベッドで休みました。

夜が明けると、おかみさんが、おいしい朝ご飯を用意していて、

「出かける前に、このスープで元氣をおつけなさい」といいました。ふたりは、お腹がいっぱいになると、杖とマントを持って出発しました。

村のはずれまで来たとき、ペテロがイエスさまにいいました。

「さっきの鍛冶屋に、いくらお札を渡せばいいかたずねもしませんでしたね。ちよつと恩知らずじゃなかったでしょうか」

イエスさまは、

「ほんとうだ。急いでもどつておくれ。もし鍛冶屋が何もいらないうつたら、願いごとを三つかなえてやることにしよう」といいました。ペテロは、よろこんで鍛冶屋の家にもどつていいました。

「あなたがたは、親切に泊めてくれたばかりか、すばらしいもてなしをしてくれました。お札にいくら払えばいいでしょうか」

「いやいや、そんな心配はいりません。あれくらいのことをするのは、あたりまえですよ」

「では、もし何も受けとつてくだらないのなら、わたしといっしょにいた師匠が、願いごとを三つかなえようと申しました。どうぞ、えんりよなく、何でも好きなことを願つてくださう」

鍛冶屋は、にこにこ笑っていました。

「はあ、どうしてもというんだったら、この安楽いすにすわったやつは、わしが下ろしてやるまでは下りられないようにしてください」

ペテロは、

「わかりました。では、第二の願いをいってください。だが、天国を願うのを忘れないように」といいました。

「では、わしの仕事場の金敷にすわったやつは、わしが下ろしてやるまでは下りられないようにしてください」

ペテロは、悲しくなって、

「願いはあとひとつしかありませんよ。天国を願うのを忘れないでくださいよ」といいました。鍛冶屋は、庭のさくらんぼの木を指さしていました。

「あの木に登ってさくらんぼを取るやつは、わしが下ろしてやるまでは下りられないようにしてください」

ペテロは、鍛冶屋のおろかさが悲しくなって、大粒のなみだを流しながら、イエスさまのところにもどって来ました。けれども、イエスさまは、

「あの鍛冶屋は、決しておろかではないと思うよ」といいました。

やがて、鍛冶屋はたいそうなお金持ちになりました。さらに大きな仕事場を建てて、二十五人のたくましい鍛冶職人を住まわせました。鍛冶屋は、職人たちをまるで自分の子どものようにたいせつにして、おいしいものを食べさせ、おこづかいもたっぷりやりました。職人たちはみな鍛冶屋を慕いました。

やがて、十年がたちました。秋の終わりのある朝、あの紳士がやって来ました。

「おはようございます。鍛冶屋の親方」

「やあ、おはようございます。仕事を片づけるまで、ちょっと座ってお待ちください」

紳士は、安楽いすに腰かけました。鍛冶屋は、

「何のご用ですか」とたずねました。

「大魔王ルシフェルの使いでしたのですよ。十年が過ぎたので、あなたを連れに来たのです」

「ああ、思い出しました。わしの署名はお持ちですか」

紳士は、やぎのひづめのついた手で、書類を引っ張り出して見せました。鍛冶屋は、

「その書類をくれれば、何でもあげますよ」といいました。

「いや。どんなことがあってもこれを渡すわけにはいきません」

そこで、鍛冶屋は、となりの部屋から鍛冶職人たちを八人連れて来ると、

「ぶんなぐれ！」とどなりました。紳士は安楽いすから下りようとしたが、どうしてもおしりがいすからはなれません。職人たちは、ハンマーで、紳士をぽかぽかなぐりました。紳士は、泣きわめきながらも、書類を渡そうとしませんでした。それでも、二度と来ないと約束したので、鍛冶屋は、紳士をはなしてやりました。紳士は足を引きずって、地獄にたどり着くのに八日もかかりました。

そのうち、冬が来ておそろしく寒くなりました。大魔王ルシフェルは、今度は、魔王ベルゼブブに書類を持たせて鍛冶屋を連れにやりました。

朝早く、鍛冶職人たちが大きな金敷の上で鉄をたたいていると、やせた紳士がやって来ました。鍛冶屋は、紳士に仕事場の中を案内して回りました。それから、紳士を氷のような風の吹きこむドアのそばに立たせておきました。やがて紳士は、寒さがたがたふるえだしました。鍛冶屋は、金敷のはしにすわって、

「職人たちがよく働いたので、金敷がまだ暖かいです」といいました。紳士は、急いで金敷にすわりました。

「やあ、この寒さでは、気持ちがいいですね」

やがて、鍛冶屋は、金敷から立ち上がりました。紳士も立とうとしましたが、金敷が、がっちり紳士をつかまえて放しません。鍛冶屋は、

「書類をよこさない。そうすれば、放してあげるから」といいました。けれども、紳士は承知しません。鍛冶屋は、となりの部屋から鍛冶職人たちを十五人連れて来ると、
「ぶんなぐれ！」とどなりました。職人たちは、ハンマーで、紳士をぽかぽかなぐりました。紳士は、泣きわめきながらも、書類を渡そうとしませんでした。それでも、二度と来ないと約束したので、鍛冶屋は、紳士をはなしてやりました。紳士は自分の骨を集めて地獄にたどり着くのに、二週間もかかりました。帰って来た魔王を見ると、ほかの悪魔たちは、鍛冶屋が地獄に乗りこんで来るのではないかとおそれて、釜の火の後ろに隠れてしまいました。

やがて、春になりました。大魔王ルシフェルは、今度は自分で鍛冶屋を地獄に連れて来ることにしました。鍛冶屋は、大魔王ルシフェルをすわらせて、たばこをふかしなが

ら、よもやま話をしていました。やがてルシフェルが、

「おまえを連れに來たのだ」というと、鍛冶屋は、

「そうですか、どうしようもないですね」といって、ふたりで裏口うらぐちから出ました。すると、裏庭うらにわに、みごとにさくらの木があつて、熟じゅくしたさくらんぼが鈴すずなりになっていました。鍛冶屋は、

「さくらんぼをちよつと食べましょう」といって、木に登っていきました。そして、どんなもいで食べはじめました。ルシフェルは、木の下で、

「親方、わしにもふたつ三つ投なげてくださいよ」といいました。食べてみると、とてもおいしかったので、ルシフェルは、もつとたくさん食べたくなりました。鍛冶屋は、「自分でもいで、好きなだけお食べなさい」といいました。ルシフェルは、一番熟したのがなっている所まで上つて行つて、どんどん食べはじめました。そのあいだに、鍛冶屋は、木から下りてしまいました。

しばらくして、鍛冶屋がまた裏庭に出てみると、ルシフェルが木から下りられずにもがいていました。助けを呼んでも、ほかの悪魔たちは、鍛冶屋こわが恐くて、だれひとり助けに來ません。

鍛冶屋は、

「書類をよこしなさい。そうすれば、放してあげるから」といいました。けれども、ルシフェルは承知しません。鍛冶屋は、となりの部屋から鍛冶職人たちを二十五人連れて來ると、さくらの木を切りたおさせました。それから、

「ぶんなぐれ！」とどなりました。職人たちは、ハンマーで、ルシフェルをぼかばかながらしました。ルシフェルは、泣きわめきながらも、書類を渡そうとしません。そこで、職人たちはますます激はげしくぶつたいたので、ルシフェルはぺしやんこになり、長いしっぽもずたずたになってしまいました。そして、とうとう、火をはきながら、書類を出しました。

鍛冶屋は、やつとルシフェルを放してやりました。ルシフェルは、こなごなになった手足をかき集めて、地獄に帰りつくのに四週間もかかりました。

鍛冶屋の家では、盛大せいたいなお祝いの会が開かれました。鍛冶屋は、このときはじめて、悪魔の書類に署名したことを、家族に話しました。

人間はだれでもいつかは死ななければなりません。鍛冶屋も年をとつて、自分の人生

もやがて終わるだろうときとりました。そこで、自分が死んだら、大きな棺桶かんおけを作って、その中に、行商用の箱をいっしょに入れてくれ、その箱には、ハンマーと棺桶用の長いくぎを三本いれておくようにといい残のこしました。

鍛冶屋が死ぬと、人びとはその望みどおりにしてやりました。鍛冶屋は、天国に向かつて歩いて行きました。天国の門に着いて、戸をたたくと、聖ペテロが、

「だれだね」とたずねました。

「鍛冶屋のハンスペーターです」と、鍛冶屋がいうと、ペテロは、

「鍛冶屋は天国には入れない」といいました。そこで、鍛冶屋はこんどは地獄じごくへ行つて戸をたたきました。

「だれだ」

「鍛冶屋のハンスペーターです」

悪魔たちは、逃げまどつて、

「鍛冶屋は地獄へは入れない」とほえました。物好きものずな悪魔が、こそこそと、

「どんなやつか、かぎ穴あなからのぞいてみようか」とささやきました。鍛冶屋は聞きつけて、行商用の箱からくぎを一本取り出して、悪魔の右目にハンマーで打ちこみました。

悪魔は痛さいたにほえて逃げもどりました。悪魔たちはみな、地獄の奥おくへ逃げこんでしまいました。

鍛冶屋は、いくら戸をたたいても返事がないので、悲しげに天国の門へ向かいました。

「だれだね」と、ペテロがたずねました。

「鍛冶屋のハンスペーターです」

「鍛冶屋は天国に入れないっていったじゃないか」

「どうして入れてくれないんです」

「かつておまえに三つの願いをしてもいいっていったとき、おまえは天国を願わなかったからだ」

「そりゃ、そうですね。でも、入れてもらえないんなら、せめてのぞくぐらいはさせてください」

ペテロは、鍛冶屋が少しかわいそうになって、天国の戸をちよつと開けました。鍛冶屋は、首をつつこんでながめました。そして、ペテロが天国の美しさうつくを説明せつめいしているうちに、戸のすきまから行商用の箱を押しこみ、ハンマーでひと押しして、すっぽり中へ

入れてしまいました。ペテロは、

「すぐにそのきたならしいものを天国から出すんだ」と命令めいれいしました。鍛冶屋は、「はい」といいながら、中に入って来て、箱の上にでんと座りこんでしまいました。ペテロが、出て行けとののしると、鍛冶屋はいいました。

「わたしは、自分の持ち物の上に乗のっているだけですよ」

ペテロはイエスさまのところに走って行って、鍛冶屋が天国にもぐりこんで、追いはらえなくなったと訴えました。イエスさまは、いいました。

「あの鍛冶屋は決しておろかではないと、前にいったではないか。あれは、恩おんになった悪魔を追いはらうために、頭を使っただけだ。まあ、ここに置おいてやりなさい。みんながハンスペーターのようだったら、天国の住民ももっとよくなるだろう」

こうして、鍛冶屋のハンスペーターは、今、天国にいます。そして、天国の裏門うらもんで、聖ヨセフの手伝てつだいをしています。

もし、ペテロがうるさくいうようなことがあれば、天国の裏門たすを訪ねなさい。そうすれば、ヨセフが入れてくれるでしょう。そして、鍛冶屋のハンスペーターが、行商用の箱を持ってうれしそうにしているのに会うでしょう。箱の中には、ハンマーと、長い棺桶用のくぎが二本しか入っていません。もう一本のくぎは、物好きな悪魔の右目に打ちこんだからです。

おしまい

村上郁再話

資料『世界の民話14 ロートリンゲン』関楠生訳／ぎょうせい